

“ますますかわいくなる人”が暮らす家

グループホーム探訪

第34回

～ようこそ、わが家へ～



チエノさんとツトムさんは気の合う二人。そしてソファは指定席。3時のコーヒーで漫才が始まる。穏やかな一日が過ぎていく

ハナコさんは編み物が趣味。毛糸があれば何でもつくる



今回のホーム

医療法人社団 岡山純心会 グループホーム矢坂本陣

住所 ● 岡山県岡山市矢坂東町3-18

定員 ● 18人(2ユニット)

管理者 ● 前田計子

超忙しい病院運営を経て

リビングルームの入口近くの3人掛けのソファでは、2人の女性入居者が談笑している。よほどおかし
いのか、互いの膝を打ち肩をたたいて笑っている。

ここは「グループホーム矢坂本陣」(前田計子理事長)で、2ユニットに現在17人の入居者が暮らしている。

前田理事長は香川県に生まれた。神戸大学医学部を卒業して、その後香川県に戻り、国立香川小児病院の小児科の勤務医になった。「10年近く小児病院に勤めました。その間、主人が善通寺前田病院を開設。私が合流しました。介護の領域に踏み出したのは平成7年です」と前田理事長は語る。

少し前から病院近くで老健をつくろうという計画があった。介護の世界に参入しなければと固く思ったのは、平成6年のゴールデンウィークのことである。前田病院の勤務医がそろって連休を取った。その間、院長と理事長の夫妻2人で、1日平均500人の外来患者を診療した。過労から、院長はぜんそくの発作を起こした。ICUに入る重体であった。「直接生命のやり取りをする医療現場で、がんばり続けることの難しさ」を感じた。長男が医学部に入ったばかりだった。

「多職種でケアを行う老人保健施設へ」と思いが強くなり、介護施設・事業所運営へと踏み出したのは平

成7年12月だった。

「グループホームでは、病院の看護師主導の病棟運営とは異なり、少人数の職員で入居者一人ひとりのリズムに合わせて生活を支えます。大変よいことだと思います」と前田理事長は語る。



前田計子理事長

では、なぜ「香川から岡山へ」か。旧知の会計士から前田理事長に、「岡山にある医療法人と社会福祉法人の譲渡を引き受けないか」との打診があった。

聞くと、もともと「グループホーム矢坂本陣」は平成11年、岡山市の委託事業として、1ユニットで発足。平成12年に2ユニットに。平成16年には「デイサービスやさか」を併設。そして、平成22年7月1日に運営主体は医療法人社団 岡山純心会となった。

そして「矢坂本陣」運営へ

前田理事長は岡山での法人継承に当たり、香川で大切にしてきた理念・方針を掲げた。

理念は「信頼される医療、想いと優しさの伝わるケア、私たちはそれを目指します」。

基本方針は、①家庭的な環境の下で、入居者の特性を踏まえて、認知症の症状の緩和と悪化を防ぐ。②虐

待防止をはじめ尊厳のある自立した日常生活を送れるよう支援する。③職員一人ひとりが、利用者と家族にサービス提供の理由を説明できるようにする。そのため、グループホーム内外の研修や勉強会に参加し、専門的知識と技術を習得する。④お年寄りにとって心地よい空間の創造と維持に努める。以上4項目である。

職員採用と育成の視点を前田理事長にうかがった。

「グループホームは1対1の介護が多く、気を張った対応は認知症の方には望ましくありません。穏やかで利他の精神に富む人。お年寄りの心を癒して、寄り添える人、明るい人を求めます。新入職者は1年目には、香川県の金毘羅さんに登り、最高の旅館で、最高のおもてなしを受けます。その誇りが、おもてなしをする時の自信に繋がります。2年目はディズニールランドで、接遇研修を受けます」

最高のおもてなしを受けた経験を持って、介護の世界に出ていく後押しをするのである。

それぞれの職員の矢坂本陣

歌が入居者を明るくする

「矢坂本陣1」の入居者は現在8人。2週間ほど前に、一人が転倒して病院に入院中であった。8人の内訳は、男性2人、女性6人。年齢は81～94歳、平均年齢85.8歳である。要介護では要介護2が5人、要介護3が2人、要介護4が1人で平均要介護度は2.5。

一方、職員は常勤が男性1人、女性3人、パート職員は2人勤めている。介護福祉士は現在3人である。

管理者の池田敏子さんは6年前に入職。平成31年4月「矢坂本陣ユニット1」の管理者になった。

入職までは、高校卒業して一般企業に入社。結婚して、出産後、専業主婦になった。

4世代同居で本家の長男の妻の座を守った。曾祖母の介護もした。在宅介護が困難になり、特養に入所。毎週の面会で、介護の仕事に興味を持った。ヘルパー2級の資格取得に挑戦した。実習で老健、グループホームを知った。資格取得後は有料老人ホームに勤めたが、グループホームの温かさが心に残った。ハローワークで見た、実家から近く待遇もよい「矢坂本陣」の面接を受けた。

入職して戸惑ったのは、入居者に思いが通じないことだった。先輩に「一人ひとり対応が違うのよ」と助言された。じっくり時間をかけて、その人に合った対応を心掛けた。3年かかった。「長く勤めるには」と介護福祉士の資格も目指した。参考書を何回も読み返し、入職3年目で介護福祉士の資格を取得した。

管理者として気配りしているのは、朝一番で自分の部屋のモップ掛けをする入居者を支援すること。入居者は、歌が好きという。歌うと、皆が生き生きする。買い物が好きな人もいる。夏は公園に虫を見に行ったりする。しかし、最近は、シルバーカーを使う人も2人いる。池田さんの気掛かりは、入居者の高齢化で狭まる活動範囲にどう対応するか。今後の課題だ。

新人が一人夜勤になると喜びがある

「矢坂本陣2」は、入居期間が長い人が多い。年齢は76～97歳で、平均年齢は87.3歳である。年齢が高いわりに、要介護度は低い。要支援2が1人。要介護1が1人、要介護2が3人、要介護3が3人、要介護4が1人。要支援2を除いた平均要介護度は、2.5である。車いすを常時必要とする人はいない。家事を積極的に手伝える入居者は2人。あとの利用者は、その時の状態を見て、お手伝いをお願いする。

一方、職員は、常勤職員が男性3人、女性3人。パート職員は女性1人である。このうち常勤職員3人とパート職員が介護福祉士の資格を持っている。

「ユニット2」の管理者は福田美子さん。岡山純心会に入職したのは16年前。第3子を出産後、一般企業に勤めながら、長く働ける職業を考え、2級ヘルパーの資格取得に進んだ。資格を得て介護老人保健施設の面接を受けた。その面接で、同じ岡山純心会の「グループホーム平津」の勤務を勧められた。この「グループホーム平津」の在職中に、介護福祉士とケアマネジャーの資格を取得し、管理者を経験した。その後、「矢坂本陣」に異動する。

福田さんが最近悩んでいることがある。それは、職員が困るとすぐに福田さんを頼ることである。

例えば、「今日はお風呂に入りたくないというご利用者がいるのですが」と聞いてくる時もある。そのような時は、「どうすればよいと思う？」と問い返す。職員一人ひとりの性格を考えて、自分で答えを出せる

福田美子
管理者
で考える介護を



池田敏子
管理者
チェックで管理



よう導いている。管理者の喜びは、新人が入ってきて一人で夜勤ができるようになった時だという。

福田さんは、今後は、同じ法人グループの保育園と入居者のかかわりをつくっていきたいと考えている。

敬老の気持ちを持って入職

「矢坂本陣2」の丹原雅彦さんが市役所勤務、一般企業を経て、「矢坂本陣」に入職したのは、平成31年4月。丹原さんには一つの思いがあった。それは“敬老”という心であった。



丹原雅彦さん／お年寄りをみさせていたたく

「私は、小学生の時に父が亡くなり、祖父母、母に育てられました。そのため、敬老の気持ちが育まれたのだと思います。日本の国を敗戦から豊かな国に導いてくださった高齢者の方々が、不本意に施設に入ったり、家族がお世話ができない状況があります。私はそうした方々のお世話をさせていただきたいと、介護の世界に入りました」と丹原さんは語る。

「矢坂本陣」を選んだのにも理由がある。「姉が亡くなり、81歳で思うように動けなくなった母を、私が近くで見守りたい。『矢坂本陣』は家からも近く、何よりも母が農協に勤めていた時にボランティアをしたところだったのです」と語る。丹原さんの当面の目標は、介護福祉士の資格取得。プロの証である資格を取って、きちんと観察して、入居者の楽しい日常生活をつくっていききたいと考えている。

矢坂本陣の特長は地域との繋がり

星島裕さんは大学卒業後、地元のスーパーに入社。

料理が好きで総菜課に勤務した。調理師の資格も取った。しかし、大学時代に経験した老人ホームでのボランティアが心にあった。何よりもおばあちゃん子で、お年寄りが好きだった。4年後スーパーを退職。失業保険を受けながら、ヘルパー2級の資格を取った。

実習先の特養から誘われて、職員になった。介護福祉士、社会福祉主事、ケアマネジャーの資格を取得した。5年間在職した。その後、グループホームに異動。寄り添う介護を見つけた。「矢坂本陣」に入職したのは、平成30年12月のことである。「矢坂本陣2」の管理者になった。その後平成31年4月には、グ

星島裕さん／歴史ある矢坂本陣での経験をもとに



750人規模の夏祭りが開催される

ループホーム「楽し愛」が開設。応援のため、異動となった。

「『矢坂本陣』を外から見て、分かったことがあります」と、星島さんは語る。「矢坂本陣」は地域との結びつきが強い。散歩では、出会った人が話し掛けてくれる。最も信頼されていると感じるのは、地域の人から「空いたら、入居したい」という言葉を聞く時だ。

この“親しさ”の原因は「矢坂本陣」の職員・管理者が積極的に町内会の会合や行事に参加しているからだと言星島さんは推測する。

星島さんは、古い歴史ある「矢坂本陣」での経験を生かして、新しいグループホーム「楽し愛」の管理者として、地域の交流を密にし、行事も地域と一体になって進めたいと考えている。

ちなみに、岡山純心会は、地域と連携を密にするための行事への参加に力を入れている。花見、七夕等を通じて、地域の福祉の拠点となるように努めている。750人規模の夏祭りは、法人全体合同で、開催される。クリスマス会も法人グループの会場で行われる。

「矢坂本陣」も同様に地域との交流を図っている。町内会と合同で行う年間行事には、どんど焼き、お花見、七夕、秋祭り、餅つき等がある。防災協力も町内会と連携した避難訓練、水害時の見回りを行っている。

前田理事長に、小児科医からグループホーム等高齢者介護ヘフィールドを広げた歩みを振り返っていただいた。「人間は赤ちゃんとして生まれて、赤ちゃんに戻って亡くなります。お年寄りはお世話をされると気丈な方ほど可愛い性格が変わっていきます」

ご利用者の可愛い笑顔が前田理事長の多忙な日々を支える原動力になっているようだ。(取材／谷口 要)